

アメリカ国民文学意識の発展

—ノア・ウェブスターからマーガレット・フラーまで—

松島欣哉

はじめに

アメリカ合衆国が正式に独立を勝ち得てから100年少し経った1890年、Frederick Rylandが、イギリス文学の主要作品の著者名とタイトルを、歴史的出来事と外国文学の主要作品と共に年代順に並べた、*Chronological Outlines of English Literature* を出版したとき、彼はその序文で、アメリカ文学を外国文学の欄に置いたのは「相当不本意であった」が、「イギリス文学と同じ欄に置けば両者の文学の関係に誤解を招く概念を与えたであろう」(viii)と書いた。1800年代の終わりになればアメリカ文学も十分成熟したと思えるが、イギリス側から見れば、全く独立した文学と見なすには躊躇されるという状況が垣間見える。この『イギリス文学年表』で最初に言及されるアメリカ文学は、William Cullen Bryant (1794-1878) の *Thanatopsis* (1817) で、次に Washington Irving (1783-1859) の *The Sketch Book* (1820)、James Fenimore Cooper (1789-1851) の *The Spy* (1821) と続く。これは、1810年代終わりから20年代の始めにかけて、アメリカ文学といえるものが出現したとのイギリス側の通常の認識を示している。

一方、『イギリス文学年表』の発行から4年後の1894年、カンザス大学で教鞭を取った Selden L. Whitcomb は、『イギリス文学年表』と同じ形式で *Chronological Outlines of American Literature* を出版した。そこには、アメリカ文学史ではおなじみの、植民地時代の歴史書、旅行記録、宗教書および政治文書が、いわゆる純文学を凌駕する勢いで所狭しと列記されている。『イギリス文学年表』に対抗するために、質を問わず何もかも詰め込んだ、という印象は否めない。

本論の目的は、独立直後から1800年代中盤までのアメリカにおける国民文学を求める機運の高まりを、イギリスにおけるアメリカ文学の認知と絡めながら概観することによって、アメリカ文学の独立を論じる際に、Ralph Waldo Emerson の “The American Scholar” (1837) のみに光があたる現状を修正することにある。

I. 1830年代までの状況

アメリカでは Magazine や Review といったタイトルを有する雑誌の発行が、国民文学の発展を示す大きな指標となりうる。Frank Luther Mott は、アメリカ人の国民文学を産み出そうとする欲求は、世紀の転換点からその後の20年間の雑誌に特に顕著に現れている、と指摘する(183)。彼によれば、アメリカで出版された雑誌は、1794年には5種類、1800年には12種類、1810年には約40種類、1825

年には約100種類に及んだ(120)。

アメリカで最初の雑誌は、フィラデルフィアで週刊新聞を発行していた Andrew Bradford (1686-1742) が1741年に発刊した *American Magazine* である。その3日後に、Benjamin Franklin (1706-90) が発刊した *General Magazine* が出たが、両誌とも6ヶ月以内に廃刊となった。モットによれば、爾来1850年までに、400種類以上の雑誌が発行されている。初期の雑誌に現れた文学作品は、当然ながら、イギリス人のものの翻刻が主で、アメリカ人の創作が出て来るには暫く時間が必要であった。

1. Noah Webster (1758-1843)

国民文学を求める機運の萌芽は、文学者においては早くも独立戦争以前に認められる。Merle Curti は、思想史と社会史とを融合した浩瀚の書 *The Growth of American Thought* (1943) のなかで、詩人の Philip Freneau (1752-1832) が、1772年にニュー・ジャージー大学の卒業式で、自由を謳歌するアメリカで芸術が興り栄えると予言した詩を朗読した、と述べている(141)。辞書編纂者の Noah Webster は、アメリカが正式に独立を果たした1783年に出版した *A Grammatical Institute of the English Language* の第一部の序文で、以下のように述べている。

This country must in some future time be distinguished by the superiority of her literary improvements, as she is already by the liberality of her civil and ecclesiastical constitutions. . . . American glory begins to dawn at a favorable period and under flattering circumstances. . . . It is the business of Americans to select the wisdom of all nations as the basis of her constitutions — to avoid their errors — to prevent the introduction of foreign vices and corruptions and check the career of her own — to promote virtue and patriotism — to embellish and improve the sciences — to diffuse an uniformity and purity of language — to add superior dignity to this infant Empire and to human nature.

(Webster Introduction. *A Grammatical Institute of the English Language*.)

「この国は、将来文学上の発展の優越性によって名を馳せるにちがいない、すでに世俗的および宗教上の制度の自由によってそうであるように。」という言葉からは、大英帝国 (British Empire) と呼ばれた覇権国家イギリスから独立を勝ち得た国民に漲る、高揚した優越感が窺える。また、そのあとにアメリカ人の使命として列挙した項目からは、世界を率いるアメリカ像を心に描いていることが明瞭に分かる。

さらにウェブスターは、1788年には、彼が編集していた雑誌 *American Magazine* に掲載した “On the Education of Youth in America” を、以下のように結んでいる。

Americans, unshackle your minds, and act like independent beings. You have been children long enough, subject to the control, and subservient to the interest of a haughty parent. You have now an interest of your own to augment and defend. You have an empire to raise and support by your exertions, and a national character to establish and extend by your wisdom and virtues. . . . Before this system can be formed and embraced, the Americans must *believe* — and *act* from the belief — that it is dishonorable to waste life in mimicking the follies of other nations and basking in the sunshine of foreign glory.

(Webster “On the Education of Youth in America” 36)

ここで注目すべきは、1783年の序文ではアメリカはヨーロッパ諸国の叡智を吸収し悪弊を排除すべきだと理性的に主張しているのに対し、1788年には、「アメリカ人よ、心の枷を取払い、独立し

た人として振る舞え」と、祖国イギリスからの精神的束縛を脱し、いわば「知的独立」を果すよう、熱っぽく唱えている点である。これはエマソンの「アメリカの学者」より50年前のことであった。

またウェブスターは、彼の雑誌*American Magazine*にハートフォードの才人 (Hartford Wits) と称された Joel Barlow (1754-1812) や Timothy Dwight (1752-1817) の詩を転載した。イギリスの雑誌がドワイトの詩人としての才能に疑問を呈したとき、ウェブスターは*American Magazine* 誌上でドワイトを擁護する論陣を張ったのだった (Mott 106)。

2. Fisher Ames (1758-1808)

1994年に出版された*The Cambridge History of American Literature*の共同編集者で、第1巻の年表を担当したCyrus R. K. Patellは、アメリカ文学を論じた最初期の文献として、フィッシャー・エイムズの“American Literature” (1803) を挙げている (Patell 760)。エイムズは、マサチューセッツ州選出の国会議員を務めたフェデラリストで、ジェファーソンと敵対し、行き過ぎた自由に基づく民主主義の弊害に警鐘を鳴らした政治家である。彼は、政治上の民主主義の発展がそのまま文学・文化の発展に資すると信じる、多くのアメリカ人の考えとは異なる見解を示したのであった。

「アメリカ文学」の中でエイムズは、アメリカ人の著作においてはヨーロッパに現れた天才 (Genius) に匹敵する人物はまだ見当たらないと指摘したあとで、「有能な者たちからなる貴族階級を禁ずることがまさしく (中略) 民主主義国家の精神なのだ」 (Ames 1008) と、アメリカに天才が輩出しない原因を民主主義政体そのものに求めた。さらに、民主主義が文学の発展を妨げる弊害を、以下のように説明したのであった。

To be the favourite of an ignorant multitude, a man must descend to their level; he must desire what they desire, and detest all that they do not approve; he must yield to their prejudices, and substitute them for principles. Instead of enlightening their errors, he must adopt them; he must furnish the sophistry that will propagate and defend them. (Ames 1008)

エイムズの言葉を理解するためには、この時期、文学を志向する者は多くが政治の世界にも足を踏み入れていた、という事情を知らなければならない。彼は、「無知な大衆」のレベルにまで身を落とし、大衆の「偏見」を行動原理とし、大衆の「錯誤」を採用しなければならないといった、アメリカの民主主義が陥る可能性のある大衆迎合主義 (populism) からは天才は生まれない、と言いたいのだ。しかし、彼は、富の蓄積が進めば富裕階級が成長し文芸を求める欲求も生まれ、才能を持った階層から天才が姿を現すだろう、と希望を述べてこの評論を結んだ。つまり、エイムズは、アメリカの民主主義がアメリカ独自の文学を産み出すと単純に考える人々とは違って、アメリカの社会構造の変革が起こって初めて、ヨーロッパが産み出した天才の文学に匹敵する文学がアメリカに生まれ出る、と結論付けたのだ。

3. Walter Channing (1786-1876)

William Tudor (1779-1830) たちによって、1815年に創刊された*The North American Review*の第1巻第3号には、“American Language and Literature” (「アメリカ語とアメリカ文学」) と題する匿名の評論が掲載された。これは、当時ハーヴァード大学で助産学の講師をしていたウォールター・チャニングが投稿したもので、そこで彼は、国民文学は「国語」 (“national language”) の正統な所産であるとの論を展開したあと、次のように続けた。

If then we are now asked, why is this country deficient in literature? I would answer, in the first place, because it possesses the same language with a nation, totally unlike it in almost every relation; and in the second, [it] delights more in the acquisition of foreign literature, than in a laborious independent exertion of its own intellectual powers. (Walter Channing 307-08)

チャニングはこの評論では結局第二の理由（「この国自身の知力を苦勞して独自に發揮することよりも、外国文学の獲得に喜びを覚えている」こと）には立ち入らないが、第一の理由（「ほぼあらゆることに関連して似ても似つかぬ国と同一の言語を所有している」こと）に関しては、ナイアガラの滝やミシシッピー川といったアメリカの壮大な自然環境を念頭に置いて、「偉大で他と異なる特徴を示す」「国土の特異性」（peculiarities of country）や風習を表現するには、「英語」（English language）では不十分であり、「独自の言語」（peculiar language）が必要であると説明する（309）。さらに、文学の獨創性という観点から、一国民がその「国民的特異性」（national peculiarities）を所有し慈しむことが欠かせないと説く。彼は、ヨーロッパでは大小の国々が国境を接しながらその国民的特異性にしがみつき、ひいてはその文学的獨創性を保っているのに対し、「この国にとっては残念なことに、国民性（national character）が欠けている」（311）と結論する。「アメリカ語とアメリカ文学」の論者は、アメリカ文学の創出に必要な欠くべからざるものとして、アメリカ語の創造とアメリカ的特性の涵養を強調したのである。

因に、前述したノア・ウェブスターはチャニングと思いを共有していた。彼が英語のアメリカ綴りの確立とアメリカ語法の定着の点で、多大なる影響を及ぼしたことは周知の事実である。ウェブスターは、当時アメリカで使われていた辞書の不完全な定義を正し、アメリカでの正字法を確立するために、1806年には *A Compendious Dictionary of the English Language* を出版した。1828年には、これまでの辞書には掲載されていなかったアメリカ由来の単語を含め約70,000語を収めた、*An American Dictionary of the English Language* を出版した。

アメリカ語法（Americanism）に限って言えば、言語学者の John Pickering（1777-1846）がアメリカ固有の単語約500語を集めた、*A Vocabulary; or, Collection of Words and Phrases Which Have Been to Supposed to Be Peculiar to the United States of America* を、1816年に出版した。

アメリカ語を確立するための道具立ては、1800年代の早い時期に出揃ったのだ。

4. Sydney Smith (1771-1845)

アメリカ人の国民文学を求める意識を高めるのに役立ったのは、1812年戦争の終結以降とくに激しさを増した、イギリスの雑誌に掲載された、アメリカ人およびアメリカ文化に対する非難・中傷であった。アメリカ人は、「忌まわしい趣味、卑俗な風習、際限のない頑迷さ、途轍もない無知と虚栄」（Curti 237）を嘲弄され、「真の宗教感情を持たず、奴隷を鞭打ち、実利主義で、粗野で、規律に欠けた国民」（同）として蔑まれたのであった。そのなかで、アメリカの文人たちに対する非難としてよく引用されるのがシドニー・スミスの難詰である。

イギリス人聖職者で、*The Edinburgh Review* の創設者の一人でもあるシドニー・スミスは、1820年1月号に、アメリカ人の政治家である Adam Seybert が編集した *Statistical Annals of the United States of America* (1818) の批評を掲載した。その際スミスは、最近のアメリカ人の講演者や新聞が、自国民を「世界中で最も偉大で、最も洗練され、最も文明開化の進んだ、最も道徳的な国民」(Smith 78-79) と最上級を使って大言壮語していることに反発し、以下のように難詰したのであった。

The Americans are a brave, industrious, and acute people; but they have hitherto given no indications of

genius, and made no approaches to the heroic, either in their morality or character. . . . During the thirty or forty years of their independence, they have done absolutely nothing for the Sciences, for the Arts, for Literature, or even for the statesman-like studies of Politics or Political Economy. . . . In the four quarters of the globe, who reads an American book? or goes to an American play? or looks at an American picture or statue? What does the world yet owe to American physicians or surgeons? What new substances have their chemists discovered? . . . When these questions are fairly and favourably answered, their laudatory epithets may be allowed: But, till that can be done, we would seriously advise them to keep clear of superlatives. (Smith 79)

(アメリカ人は勇敢で勤勉で鋭敏な国民ではあるが、これまでのところ、道徳と品性のどちらの点でも、天賦の才を示してもいなければ、英雄的行為に類することもしてはいない。(中略) 独立してから30年あるいは40年のあいだ、彼らは科学のためにも、人文学のためにも、文学のためにも、あるいは政治学や政治経済学のためにさえ、まったく何もやってはいない。(中略) 一体この世界中で、誰がアメリカ人の本を読み、アメリカ人の芝居を見に行き、アメリカ人の絵画や彫刻を見るというのか。これまでのところ世界はアメリカ人の内科医や外科医に何を負っている。アメリカ人の化学者は新たにどのような物質を発見したというのだ。(中略) このような質問に正当にかつ賛同を得られるように答えられる場合には、彼らの自画自賛の形容辞も許されよう。しかし、それがなされるまでは、最上級の形容辞は避けるよう我々は真剣に勧めたい。)

スミスのこの批評は、1820年7月にアメリカで発行された *The Literary and Scientific Repository, and Critical Review* と題する季刊誌に再掲され、より多くのアメリカ人の目に振れ、彼らの大いなる反発を招くと同時に、国民文学創成の機運を盛り上げるのに役立ったのである。¹

この前後の数十年間、イギリスの文芸雑誌とアメリカの雑誌との間には、いわゆる「紙の戦争 (paper war)」と呼ばれ状況が起こった。アメリカの雑誌では、Edgar Allan Poe (1809-1849) が揶揄したように、アメリカのテーマのみを求める偏狭な態度をとる論調が優勢になる時期もあった。

ポーは *Graham's Lady's and Gentleman's Magazine* の1842年1月号の「新刊批評」において、「大英帝国のご託宣に盲従するという完璧な喜劇」(Poe 68) を演じることから、「アメリカ的」主題を扱ったアメリカ人による文学のみを求めるという対極へすっかり振れてしまった自国民を揶揄して、次のように書いた。

In throwing totally off that “authority,” whose voice had so long been so sacred, we even surpassed, and by much, our original folly. But the watchword now was, “a national literature!” — as if any true literature could be “national” — as if the world at large were not the only proper stage for the literary *histrion*. We became, suddenly, the merest and maddest partizans in letters. . . . Unmindful of the spirit of the axioms that “a prophet has no honor in his own land” and that “a hero is never a hero to his valet-de-chambre” — axioms founded in reason and in truth — our reviews urged the propriety — our booksellers the necessity, of strictly “American” themes. (Poe 68)

(その声をあれほど長くあれほど神聖視してきた「権威」をすっかりかなぐり捨てることによって、我々は最初の愚行を凌いでしまった、しかも甚だしく。しかるに、今や合言葉は「国民文学を！」となった — まるで真の文学とはどれも「国民的」たりうるかのごとく — まるでこの世界全体が文学の役者にとって唯一格好な舞台ではないかのごとく。我々は突然、文学上この上なく狂気じみた紛れもない偏狭者となったのだ。(中略)「預言者は故郷で敬われることなし」

とか「働仕えに英雄なし」といった、理性と真実に裏打ちされた諺の精神を心に留めず、我が書評子たちはもっぱら「アメリカ的」テーマの妥当性を、書店主たちはその必要性を、力説したのだ。）

ポーはこのすぐ後で、「実は、この感情の異常な状態が沈静化を示したのはごく最近のことである」(同)と言っている。彼が揶揄しているのは、1820年代、30年代の国民文学を求める熱狂の高まりのなかで、アメリカの歴史や地理にのみ文学の素材を求める国家主義的な傾向であることがわかる。²

II. アメリカ国民文学と超絶主義者たち

1. William Ellery Channing (1780-1842)

エマソンは、のちに「アメリカのアテネ」との諱名（ごんめい）を与えられるボストンを抱えるマサチューセッツ州の、1790年から1820年までの一世代を1852年から振り返って、「この州には、本も演説も会話も思想も、何一つなかった」(*Journals* 13:115)と、知的活動の貧困に苦しんでいた状況を嘆いた。つまり、エマソンも、スミスが指摘したように、独立後の知的活動の停滞を認めざるを得なかったのである。しかし、そのすぐ後でエマソンは、「1820年頃に、チャニング [William Ellery Channing] とウェブスター [Daniel Webster] とエヴァレット [Edward Everett] の時代が始まった」(同)と付け加えた。おそらくエマソンはチャニングを知的停滞を破った第一の功労者と見なしていたと考えて間違いなかろう。チャニングはアメリカにおけるユニテリアニズムの発展に最も功績のあった牧師であるが、彼もまた国民文学の創出の必要性を説いたのだった。³

チャニングは *The Christian Examiner* の1830年1月号に、彼自身の国民文学論を掲載した。この評論は、政治家の Charles Jared Ingersoll (1782-1862) がイギリス人たちの非難に対する反論として発表した “Influence of America on the Mind” (1823) に対する書評のような型を取っている。このときの欄外見出しは “National Literature” (国民文学) であった。ここでチャニングは国民文学を発展させるには、イギリス人の非難に対する反論としてインガソルが誇った、中等教育の普及と実用的知識の蓄積では不十分で、「高貴な知識人仲間」(124) である「天賦の才を授かった少数者」(130) を育成することである、と主張したのだった。

チャニングの「国民文学論」は貴族主義的であると同時に、この時代の国家主義的傾向も示している。彼は、「文学界が大家族をなし、精神の産物が機械の産物より速やかに流通するこの時代には、国家の名が国境を越えて榮譽を以て口にのぼらなければ、それはその国家自身の責任である」(127) と言う。チャニングは「一国民が大まじめに切望してしかるべき榮譽」(同) とは「優れた人物を排出している」(同) ことだと信じる。それ故、他国に比肩する「威風堂々たる文学」(127) を生み出すのに必要な、「知性の自由な訓練」(128) を行う高等教育機関がもっと必要だと説くのである。この機関から、国民文学を産み出す主体となる「文筆家兼思索家 (literary and thinking men)」が排出されるからだ。

牧師であるチャニングが国民文学を求める時代精神に竿さして貴族主義的文学論を展開した背景には、Andrew Jackson (1767-1845) に率いられた一般大衆のエネルギーにより気圧された従来の支配階級に対し、外国に対抗できる知的活動の主体が彼ら自身であることをもう一度自覚させる意図があったと思われる。チャニングは「手仕事に従事している人々」 (“Self-Culture” 12) を対象にした講演を、1838年9月にボストンでおこなった。そのなかで彼は個人のレベルでの自己改革・向上を目指すことを求め、ゆき過ぎた党派心 (party spirit) は自己修養の敵である、と注意を喚起している。

Our institutions do not cultivate us, as they might and should; and the chief cause of the failure is plain. It is the strength of party-spirit; and so blighting is its influence, so fatal to self-culture, that I feel myself bound to warn every man against it, who has any desire of improvement. I do not tell you it will destroy your country. It wages a worse war against yourselves. Truth, justice, candor, fair dealing, sound judgment, self-control, and kind affections, are its natural and perpetual prey. (W. E. Channing “Self Culture” 27)

「(党派心は)あなた方自身に対し、一層ひどい戦いを仕掛けます。真実、正義、率直、公正な扱い、的確な判断、自制および優しさは、自然にまた絶え間なく党派心の餌食になります。」と言うことによって、チャニングは、ジャクソン流民主主義が階級間の対立を煽る結果を招き、社会改革にばかり目が向き、その結果として自己修養から目を背けることになる弊害を懸念したのである。

「国民文学論」の国家主義的特徴は、以下の部分で一層明確になる。

We delight to believe that God, in the fulness of time, has brought a new continent to light, in order that the human mind should move here with a new freedom, should frame new social institutions, should explore new paths, and reap new harvests. (W. E. Channing “National Literature” 134)

ここでチャニングは、アメリカ国民文学の発展の必然性を、1630年にマサチューセッツ湾植民地を築くことになる一行に向かって John Winthrop がアーベラ号上でおこなった説教「キリスト教徒の慈愛の雛形」(“A Model of Christian Charity”)以来、連綿と続く、世界に模範を示し率いることが神の課した「アメリカの使命」だという、より大きな「国家/国民の物語 (National Narrative)」に落とし込んだのである。

しかし、チャニングは国民文学論を国家主義的発言で締め括らず、宗教的言葉で結んだ。それは、「国民文学」におけるチャニングの立場が飽くまでも宗教家としてのそれであることに由来する。チャニングは、「より高尚な」、「向上した文学」(136)の出現には「宗教原理」(同)に頼らねばならないと言う。そして、そのような「宗教原理」の特徴として、暗にカルヴィニズムと対置させて、「理性と良心と最高の愛情」(同)と調和する「真の信仰」を挙げたのだった。

2. Ralph Waldo Emerson (1803-1882)

1836年に匿名で出版した *Nature* の冒頭において、「なぜ我々も [過去の人々と同様に] 宇宙に対して独自の関係を持たないのであろうか。何故我々は、伝来のものではなく、直感の詩と哲学を、祖先の宗教の歴史ではなく、我々に啓示された宗教を、持たないのであろうか。」(Emerson *Nature* 7) と人々に迫ったエマソンは、翌1837年8月31日、ハーヴァード大学のファイ・ベータ・カップ学友会で、のちに「アメリカの学者」として知られる講演をおこなった。ここでも冒頭においてエマソンは、

Perhaps the time is already come . . . when the sluggish intellect of this continent will . . . fill the postponed expectation of the world with something better than the exertions of mechanical skill. Our day of dependence, our long apprenticeship to the learning of other lands, draws to a close. . . . Events, actions arise, that must be sung, that will sing themselves.

(Emerson “The American Scholar” 52)

(この大陸の怠け者の知性が(中略)機械的技量の発揮より良いもので、先延ばしにされてきた

世界の期待に応える時が、おそらく既に来ています。我々の依存の時代、他国の学問に対する我々の長い徒弟時代は、終わりに近づいています。(中略)詠われねばならぬ、また自ら詠いだす事件や行為が興っているのです。)

と、アメリカ独自の知的活動の所産を産み出す必要性を強調した。「アメリカの学者」は、一言で言えば、人間の「知性を代表する者」として「考える人 (Man Thinking)」(53)である学者が、現世という学校で如何に教育されるかを、自然と書物と行動という3つの観点から考え、「自己信頼 (self-trust)」(63)の必要性を唱えた講演だった。エマソンが“Man thinking”と呼ぶ「学者」は、一見したところ、チャニングが「文筆家兼思索家 (literary and thinking men)」と呼ぶ国民文学を創出する主体と同じように聞こえる。確かにエマソンは「アメリカの学者」において、「学者の務めは、仮象の最中にある事実を示すことにより、人々を元気づけ、引き上げ、導くことです。」(62)と、知識階級である学者による一般民衆の教導の姿勢を示している点で、チャニングと同じように貴族主義の立場を取っているように見える。しかし、エマソンは「人間は一つである」(106)、「正しく見れば、一人の人間が全ての人間の固有の性質を内包している」(108)と言っているように、決して「天賦の才に恵まれた少数者」が「学者」となる、とは考えていない。この点を明らかにしているのは、1840年7月に刊行された超絶主義者たちの機関誌*The Dial*の創刊の辞“The Editors to the Reader”である。

Margaret Fuller (1810-1850) の伝記を書いたMegan Marshallによれば、最初「編集者から読者へ」の草稿はフラーが書いた。それをフラーはエマソンとリプリーに送り意見を聞くと、両者の意見を折衷することはできず、結局エマソンが「編集者から読者へ」の原稿を書いた (Marshall 150)。「編集者 (Editors)」が複数になっていることから分かるように、エマソンは彼一人の考えとして創刊の辞を書いた訳ではなからう。エマソンの声とフラーの声とを聞き分けることは不可能だが、便宜上ここで論じる。

編者たちは、この雑誌の目的を以下のように述べる。

Our plan embraces much more than criticism. . . . Everything noble is directed on life, and this is. We do not wish to say pretty or curious things, or to reiterate a few propositions in varied forms, but, if we can, to give expression to that spirit which lifts men to a higher platform, restores to them the religious sentiment, brings them worthy aims and pure pleasures, purges the inward eye, makes life less desultory, and, through raising man to the level of nature, takes away its melancholy from the landscape, and reconciles the practical with the speculative powers. (“The Editors to the Reader” 3-4)

(大意 我々の計画は批評以上のものを包摂している。(中略)高貴なものはすべて人生/生活に向けられる。この計画もそうだ。我々は(中略)できれば次のような精神を表現したいと望む、人々を一段と高い壇に引き上げるもの、人々に宗教的感情をとりもどすもの、価値ある目的と清純な喜びをもたらすもの、内なる目を清めるもの、人生をより纏まりのあるものにするもの、そして、人間を自然のレベルまで引き上げることとおして、風景から憂鬱なものを取り払い実際のなものと思索的なものとを融和させるものだ。)

このような高尚な目的に資するべく、寄稿者に期待する内容は次のとおりだ。

As we wish . . . to report life, our resources are therefore . . . the discourse of the living, and the portfolios which friendship has opened to us. From the beautiful recesses of private thought; from the experience and hope of spirits which are withdrawing from all old forms, and seeking in all that is new

somewhat to meet their inappeasable longings . . . we hope to draw thoughts and feelings, which being alive can impart life. (“The Editors to the Reader” 4)

(我々は人生/生活を報告することを願っているので、我々が頼みとするのは生活している者たちの談話や友情から我々に開いてくれた紙ばさみだ。胸の奥にいだかれた美しい思想から、すべての古い形式から後退しあらゆる新しいものの中に満たされない憧れを叶える何ものかを求める精神の、経験と希望から(中略)、我々は思想と感情を引き出すことを望んでいる、生き生きしている故に人生を分ち与えることのできる思想と感情を。)

その寄稿者は「あらゆる環境に属する人々、あらゆる素質を持つ人々」である。エマソンたちが考える「真理に対する愛」を以て生活に根ざした思想や感情を表現する人々は、チャニングが考えた「天賦の才を授かった少数者」とはほど遠い。自己信頼を生きる全ての人々が新たな文学の担い手となる、とエマソンたちは考えているのだ。チャニングの態度を貴族主義的と呼ぶならば、エマソンたちのそれは民主主義的と呼んでもよからう。

ところで、アメリカ文学の独立を論じる際になぜエマソンの「アメリカの学者」のみに光が当たるのか。それは Oliver Wendell Holmes (1809-94) が、エマソンの伝記 *Ralph Waldo Emerson* (1884) のなかで、「アメリカの学者」の講演を回想し、「この偉大な講演は我々の知的独立宣言 (intellectual Declaration of Independence) だった」(115) と言ったことによって、特に有名になったからである。しかし、我々がこれまで見て来たように、ノア・ウェブスターが「アメリカ人よ、心の枷を外し、独立した存在として行動せよ」と要請して以来、多くのアメリカ人がその必要性を感じ、特に1820年のシドニー・スミスの「誰がアメリカ人の本など読むものか」との非難以後は、文学界にその傾向が顕著になっていた。ホームズはこの講演を聴いた時の高揚感を思い出して「知的独立宣言」という言葉を使ったのだが、その7年後に書かれた *Over the Teacups* (1891) においてエマソンに言及したときは、「文学上の独立宣言 (Declaration of Literary Independence)」(233) と修正し、エマソンは旧世界の学問の伝統全てから自分を断ち切った訳ではないと、以下のように批判している。

One of Mr. Emerson’s biographers has claimed that his Phi Beta Kappa Oration was our Declaration of Literary Independence. But Mr. Emerson did not cut himself loose from all the traditions of Old World scholarship. . . . In short, with all his originality, he worked in Old World harness, and cannot be considered as the creator of a truly American, self-governed, self-centred, absolutely independent style of thinking and writing, knowing no law but its own sovereign will and pleasure. (Holmes *Over the Teacups* 233)

しかし、エマソンの立場は、旧世界の価値観に盲従する態度を断ち切り「自己信頼」に基づき行動することにあるのであって、旧世界の文化・学問・文学の一切を打ち捨てて、「真にアメリカ的で、自治的で、自己中心的で、絶対的に独立した思考様式・文体」を追求するものではない。それは、1849年に出版した *Representative Men* でシェイクスピアやゲーテを論じたり、1856年には *English Traits* を発表したことから明らかであろう。

3. Orestes A. Brownson (1803-1876)

オレスティーズ・A・ブラウンソンは、長老派からユニテリアン派、最後にはカトリックへと宗派を渡り歩いた牧師であるが、一時期、エマソンやソローたちと親交があり、超絶主義者たちの討論サークルである Transcendental Club にも短期間ながら参加した。ニューイングランドの超絶主義

運動を纏めた聖職者 Octavius Brooks Frothingham (1822-1895) は、ブラウンソンを「れっきとした超絶主義者 (pronounced Transcendentalist)」(Frothingham 128) だと言っている。

ブラウンソンは、1838年7月にエマソンがダートマス大学でおこなった“Literary Ethics”と題する講演の批評を、彼が編集する雑誌 *Boston Quarterly Review* の1839年1月号に掲載した。エマソンがアメリカ人の物質主義を非難したのに対し、ブラウンソンは、まず生活を安定させることが第一なのだから、アメリカ人の精神が物質面を向かざるを得なかったのは当然だと擁護した。また、物質的欲求が満たされれば、次は魂の欲求を満たすことに同じように熱心になろう、と楽観論を述べた。この講演でエマソンは学者個人の自己信頼とオリジナリティーの重要性を強調したが、それに対しブラウンソンは、「[文学は] 国民生活の表出であり具現だ。その性格はあれこれの一個の人間ではなく、国民精神 (national spirit) によって決定される」(Brownson “American Literature” 146) と述べた。⁴ エマソンがアメリカ文学の成立を個人の精神の発現に見たのに対し、ブラウンソンはアメリカの一般大衆の意識の表現に見たのである。これには二人の出自の違いが大いに関係していたように思える。

ブラウンソンは、1839年9月にブラウン大学でおこなった講演ではより強い口調で以下のように学生に語った。

Now nothing is more certain than that the men, who create a national literature, must be filled with the spirit of their nation, be the impersonations of its wishes, hopes, fears, sentiments. The American people are democratic . . . and consequently the creators of American literature must be democrats. . . . [I]t is only they who conform to it[democracy], not from policy, but from the heart, from the real love of democracy, and a full understanding of what it is, that can do much to advance American literature. (Brownson “Oration” 202-03)

(いまや、これ以上確かなことはありませんが、国民文学を創造する者は、その国民の精神に充たされていなければなりません、国民の願望、希望、恐れ、感情などの具現者でなければなりません。アメリカ国民は民主的です、(中略) 従って、アメリカ文学の創造者は民主主義者でなければなりません。(中略) 民主主義に対して、政策上からではなく、心から、民主主義に対する真の愛情から、そしてその本質を十分理解した上で、賛同する者だけが、アメリカ文学の前進のために尽くすことができるのです。)

文学と民主主義とを直接結びつけて論じるブラウンソンの姿勢は、その後、Walt Whitman の *Democratic Vistas* (1871) に引き継がれるのである。

4. Margaret Fuller (1810-1850)

マーガレット・フラーは、法律家でマサチューセッツ州選出の国会議員にもなった父親から、幼時には男の子顔負けの英才教育を受け、その後通常の公教育、16歳までは女性が受ける教育を受け、その後自宅へ戻り、古典、諸外国語および外国文学を独習した。1835年父親の突然の死により、25歳の彼女は家計を支えなければならない立場に置かれ、Amos Bronson Alcott (1799-1888) などの学校で教師をする。1836年、エマソンとユニテリアン派の牧師 Frederic Henry Hedge (1805-1890)、George Ripley (1802-1880) および George Putnam (1807-1878) が Transcendental Club を結成すると、エマソンと知り合いになった彼女は、この討論サークルに参加するようになる。会員には、ブラウンソン、教育家のオールcott、Henry David Thoreau (1817-1862) もいた。彼らは宗教・哲学・文学・社会改革など様々な話題について議論をした。そのうち、独自の機関誌を発行す

ることになり、フラーは1840年から2年間、『ダイアル』の最初の編集長を務めた。その後、5大湖への旅行を綴った*Summer on the Lakes, in 1843* (1844) を出版し、その文才が日刊紙*New-York Tribune*の創設者であるHorace Greeley (1811-1872)の目にとまり、寄稿者、のちには編集者となった。

1844年に出版した『五大湖の夏』において、フラーは移民の農夫やインディアンといった社会的弱者に暖かい目を向けている。そして詩人に対し、「詩をすっかり犠牲にしてもこれらの職[木こりなど]の一つを描かなければならない。労働者は彼が稼ぐ金を産み出す真のミダス王なのだ。画家がイタリア人の小作農の少女やデンマーク人の魚売りの女を、美を付け足し汚れを省いて描くように、詩人も描かなければならない。」(Fuller *Summer on the Lakes* 18) と、アメリカ人詩人の詠う対象を提示している。

また彼女は、旅の途中や帰宅後に読んだ書物として、白人の探検家、入植者、旅行家が書いたインディアンの生活記録や旅行記、インディアンの血を引く女性と結婚した白人の記録等を、随所に^{ちりば}鏤めている。ここでもフラーは、アメリカ文学の素材を提示しているように思える。

フラーは1846年に発表した“American Literature”の冒頭で、「[アメリカ文学]が存在しうるようになるには、ある独創的な観念がこの国に生命を吹き込み、新鮮な生命の流れがその国土に新鮮な思想を呼び起こさなければならぬ」(122) と言って、アメリカ文学がまだまだ確たる存在とは言えないことを認めたくえて、議論に入る。アメリカ文学の詩の現状に言及するときフラーは、既に名声の確立したHenry Wadsworth Longfellow (1807-1882)を、世間一般の評価を退けて模倣家として低く評価する。

Longfellow is artificial and imitative. He borrows incessantly, and mixes what he borrows, so that it does not appear to the best advantage. He is very faulty in using broken or mixed metaphors. The ethical part of his writing has a hollow, secondhand sound. (Fuller “American Literature” 132)

(ロングフェローは人工的で模倣家だ。彼は絶えず借用し借用したものを混ぜ合わせるので、十二分に引き立って見えることはない。崩れたあるいは混じり合った隠喩を使う点で彼には大いに非がある。彼の書き物の倫理的な部分は空疎で借り物の響きがする。)

これは前年の1845年にポウがロングフェローの詩の剽窃(plagiarism)を非難したことを受けてのことであるが、フラー自身は1845年に*New-York Daily Tribune*紙上でロングフェローの詩集を書評した際に、ポウのロングフェロー剽窃論には賛同してはいない。⁵しかし、ギリシア・ラテンの古典語はもちろん、フランス語・ドイツ語・イタリア語等の近代語に通じたロングフェローが詩を書くとき、無意識のうちにこれらに影響されていることを認めて、模倣家と呼んだのだ。ロングフェローの詩には「生き生きしている故に人生を分ち与えることのできる思想と感情」(Emerson “The Editors to the Reader” 4)を認めることが出来ない故に、フラーはロングフェローを高く評価できなかったのであろう。

その一方で、彼女は同じ超絶主義者であるエマソンと詩人のWilliam Ellery Channing (1818-1901)の詩には高い評価を与えている。ほぼ無名のチャニングの詩に対しては、「この詩全体のまぎれもない壮大さは誰も感ずるに違いないが、それぞれの行と思想は、きわめて真剣な生活と思索をしたあとになって、真剣な観照に値し、満足を与えるものであることがわかるであろう。」(Fuller “American Literature” 133) と、最大の賛辞を贈っている。フラーは有名無名にかかわらず、真摯に人生と向き合った詩人の詩を高く評価しているのだ。そしてこのような詩にアメリカ文学の未来を見ているのである。

むすび

以上、アメリカの政治的独立以降に顕著となる、アメリカ文学の独立を求める声を追ってきたが、注目すべきは、これを論じる人々が、文人に限らず、医者・政治家・牧師といった、幅広い職種の人々であることだ。独自の文学を確立することと国家意識とが分ちがたく結びついていることの証左であろう。

アメリカ文学の独立全体を論じるには、Nathaniel Hawthorne (1804-64) や Herman Melville (1819-91) にも言及しなければならないのは当然である。ホーソンには、アメリカ文学の創造という大いなる使命を成し遂げるべく運命づけられている「天才の巨匠」を描いた“A Select Party” (1844) があり、メルヴィルには有名な評論“Hawthorne and His Mosses” (1850) があるのは承知している。今回は、アメリカ文学の独立に向かう意識の流れを、超絶主義者たちまで追ってみた。両作家については、他日を期したい。

付記

本論は、2016年6月12日(日)、広島経済大学立町キャンパスで開催された、中・四国アメリカ文学会第45回大会のシンポジウムにおいて発表した内容に加筆・修正を加えたもので、JSPS 科研費基盤研究(C) 課題番号 26370319の助成による研究成果を含む。

Notes

1. Robert E. Spillerは、1929年3月に発行された*American Literature*の第1巻第1号の巻頭論文“The Verdict of Sydney Smith”において、この評論を含むスミスの3編のアメリカに関する評論を検討している(pp. 1-13)。これはスミスのアメリカ評論—特に「誰がアメリカ人の本など読むものか」という難詰—が、アメリカ文学の発展において重要な意味を持っていることを物語っている。
2. ポウは1845年、編集長を務めていた週間誌*The Broadway Journal*の10月4日付けの記事で、この見解を以下のように繰り返した。

Much has been said of late, about the necessity of maintaining a proper *nationality* in American Letters; but what this nationality *is*, or what is to be gained by it, has never been distinctly understood. That an American should confine himself to American themes, or even prefer them, is rather a political than a literary idea—and at best is a questionable point. We would do well to bear in mind that “distance lends enchantment to the view.” *Ceteris paribus*, a foreign theme is, in a strictly literary sense, to be preferred. After all, the world at large is the only legitimate stage for the aurtorial *histrion*. (Thompson 1,076)

国家主義によって政治的に狭隘化された文学からは、底の浅い文学しか生まれ出ないことを、ポウは懸念しているのである。フランスやスペインやイタリアはもとより、どことも知れぬ舞台を背景に人間の心理を描いたポウにとっては、許しがたいことであつたと容易に推測出来よう。
3. なお、チャニング自身は超絶主義者であることを否定するが、Perry Millerは彼が編集した*The Transcendentalists: An Anthology* (1950) において、チャニングを超絶主義者たちの先駆けとして扱っているので、本論でもそれに倣い、超絶主義者たちの先頭に置く。
4. エマソンの「文芸の倫理」に対するブラウソンンの批評に関しては、拙論「Emerson の初期の評論に対する Orestes A. Brownson の批評」(『柴田昭二先生御退職記念論文集』(柴田昭二先生退職記念事業会、2016. pp.43-56)を参照願いたい。
5. ポウは1845年1月14日発行の週間誌*Evening Mirror*において、ロングフェローの詩集*The Waif* (1845) を批評したさい、Thomas Hoodの“The Death Bed”との類似を指摘し、ロングフェローは「物まねをする」と酷評した。それに対しロングフェローの友人が反論したとき、今度は剽窃(plagiarism)という言葉を用いて*The Broadway*

Journal で5回に亘って反駁をおこなったのである。Thompson, G. R., ed. *Edgar Allan Poe*. pp.705-18, pp.718-25, pp.725-40, pp.740-57, pp.758-77.

Works Cited

- Ames, Fisher. "American Literature." 1803. *The English Literatures of America, 1500-1800*, edited by Myra Jelen and Michael Warner, Routledge, 1997, pp.1,000-09.
- Bean, Judith Mattson and Joel Myerson, eds. *Margaret Fuller, Critic: Writings from the New-York Tribune, 1844-1846*. Columbia UP, 2,000.
- Brownson, Orestes A. "American Literature." 1839. *The Early Works of Orestes A. Brownson*, edited by Patrick W. Carey, vol. IV, Marquette UP, 2003, pp.133-52.
- . "An Oration on American Literature." 1840. *The Early Works of Orestes A. Brownson*, edited by Patrick W. Carey, vol. V, Marquette UP, 2004, pp.197-214.
- [Channing, Walter.] "American Language and Literature." *The North American Review*, vol. 1, no. 3, Sep. 1815, pp.307-14. <http://ebooks.library.cornell.edu/cgi/t/text/text-idx?c=nora;cc=nora;view=toc;subview=short;idno=nora0001-3>. Accessed 30 Nov. 2016.
- Channing, William Ellery. "Remarks on National Literature." 1830. *The Works of William E. Channing, D.D.*, Part 1, Kessinger, [2010], pp.124-38.
- . "Self-Culture." 1839. *The Works of William E. Channing, D.D.*, Part 1, Kessinger, [2010], pp.12-36.
- Curti, Merle. *The Growth of American Thought*. 3rd ed., Transaction, 2004.
- Emerson, Ralph Waldo. "The American Scholar." *The Collected Works of Ralph Waldo Emerson*, edited by Alfred R. Ferguson et al., vol. 1, Belknap P of Harvard UP, 1971, pp.52-70.
- . *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson*. Vol. 13, edited by Ralph H. Orph and Alfred R. Ferguson, Belknap P of Harvard UP, 1977.
- . *Nature*. *The Collected Works of Ralph Waldo Emerson*, edited by Alfred R. Ferguson et al., vol. 1, Belknap P of Harvard UP, 1971, pp.7-45.
- [Emerson, Ralph Waldo and Sara Margaret Fuller.] "The Editors to the Reader." *The Dial: A Magazine for Literature, Philosophy, and Religion*, vol. 1, no. 1, Boston, 1840, pp.1-4.
- Frothingham, Octavius Brooks. *Transcendentalism in New England*. Boston, 1876. Harper & Brothers, 1959.
- Fuller, S. Margaret. "American Literature; Its Position in the Present Time, and Prospects for the Future." *Papers on Literature and Art*. Part I & Part II. 1846. AMS, 1972, Part II, pp.122-43.
- . *Summer on the Lakes, in 1843*. 1844. U of Illinois P, 1991.
- Holmes, Oliver Wendell. *Ralph Waldo Emerson*. Boston, 1884. <https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=mdp.49015000522350;view=1up;seq=13>. Accessed 30 Nov. 2016.
- . *Over the Teacups*. *The Writings of Oliver Wendell Holmes*, vol. IV. Boston, 1892. <https://ia601406.us.archive.org/35/items/overteacups00munrgoog/overteacups00munrgoog.pdf>. Accessed 30 Nov. 2016.
- Ingersoll, C. J. *A Discourse concerning Influence of America on the Mind*. Philadelphia, 1823. <https://archive.org/details/adiscourseconce00socigooq>. Accessed 30 Nov. 2016.
- Jehlen, Myra and Michael Warner, editors. *The English Literatures of America, 1500-1800*. Routledge, 1997.
- Marshall, Megan. *Margaret Fuller: A New American Life*. Houghton Mifflin Harcourt, 2014.
- Mott, Frank Luther. *A History of American Magazines 1741-1850*. Vol. 1, Belknap P of Harvard UP, 1958.
- Patell, Cyrus R. K. "Chronology: 1590-1820." *The Cambridge History of American Literature*, vol. 1, edited by Sacvan Bercovitch et al., Cambridge UP, 1994, pp.695-766.

- Poe, Edgar Allan. "Review of New Books." *Graham's Lady's and Gentleman's Magazine*, vol. 20, no. 1, Jan. 1842, pp.68-69. <https://archive.org/details/grahamsmagazine2021grah>. Accessed 30 Nov. 2016.
- Smith, Sydney. "America." *Edinburgh Review*, vol. 33, Jan. 1820, pp.69-80. <http://dspace.wbpublibnet.gov.in:8080/xmlui/handle/10689/13942>. Accessed 30 Nov. 2016.
- Thompson, G. R., editor. *Edgar Allan Poe: Essays and Reviews*. Library of America, 1984.
- Webster, Noah. Introduction. *A Grammatical Institute of the English Language*. Part I. Boston, 1783. <http://www.donpotter.net/pdf/webster-1783.pdf>. Accessed 30 Nov. 2016.
- . "On the Education of Youth in America." *A Collection of Essays and Fugitiv Writings*. Boston, 1790, pp.1-37. <https://archive.org/details/collectionofess00webs>. Accessed 30 Nov. 2016.